



現代人形研通信

5号 2024年8月発行

目次

- ・現代人形研からのお知らせ
- ・インフォメーション
- ・活動報告
- ・展覧会レポート
- ・特別寄稿 hitodama ART ～ヒトガタのアート展～
高野明子（クラフトアート人形コンクール実行委員会）
- ・徒然コラム 理事の所感と近況報告

特別寄稿

「hitodama ART ～ヒトガタのアート展～」

高野明子（クラフトアート人形コンクール実行委員会）

特集寄稿はこの通信最後部に掲載しております。



現代人形研からのお知らせ

第1回 総会のお知らせ

前号でもお知らせしましたが、当会が特定非営利法人としてはじめての総会を開催いたします。正会員（個人・団体）の方へはメール、または書面にてご案内をお送りしています。出席（欠席の方は委任状提出）をお願いいたします。今までと今後1年間の予算や活動の報告などをおこないます。

開催日 9月1日（日） 午後1時30分～午後5時

午後1時開場

第1部（13:30～15:00） 総会

第2部 ゲストを迎えてのフリートーク（ゲスト よねやまりゅう氏 テーマ 1970～80年代の創作人形界）

会場 日比谷図書文化館 スタジオプラス（小ホール）

東京都千代田区日比谷公園 1-4

アクセス

東京メトロ 丸の内線・日比谷線「霞ヶ関駅」B2出口より徒歩約3分

都営地下鉄 三田線「内幸町駅」A7出口より徒歩約3分

東京メトロ 千代田線「霞ヶ関駅」C4出口より徒歩約3分

会場 URL <https://www.library.chiyoda.tokyo.jp/space/hibiyastudio/>

懇親会中止

懇親会参加希望者が規定人数に満たなかったため、開催は見送ります。

【現代人形研—CoNiCS（コニックス）展】出品者募集中

当会の会員のための自由な人形展です。会員であればお気軽にご参加ください。中華街での懇親会も計画しています。

来年は東京都美術館で全国公募展開催のため、CoNiCS展は来年は開催いたしません。

会期 11月27日（水）～12月1日（日）

会場 横浜人形の家 多目的室

参加費 4000円（一人1点または1セットまで）

（委託料 片道1000円）

参加資格 当会会員（正会員・賛助会員）

定員 先着40名（審査なし）

申込開始 定員になり次第〆切

申込方法 下記の専用フォームからお申し込みください。

<https://forms.gle/HJuLeurQ5vDeyLE5A>

※本展は最終日がドールワールドアニマルフェスティバル開催日と重なるため、希望者には11月30日搬出に対応いたします。

ボランティアも同時募集（出品者も申込みできます）

会期中の受付と監視当番です。当会規定の交通費と謝礼をお支払いします。1日だけできる方でもどうぞ。詳しくは member.gendainingyo@gmail.com までお問い合わせください。

インフォメーション

MISOROGI 人形展

人形の原点からの多様性を探る人形展。創作、民芸、国内、海外の作家 32 名による展示です。本年は言葉なきストーリーテラーとしての人形「にんぎょう・がたり」をテーマにしました。

8月28日(水)～9月3日(火)

午前9時～午後9時(最終日は午後3時閉場)

丸の内オアゾ 丸善丸の内本店4F ギャラリー A

出品作家【国内】 Archibras / 飯野モモコ / ウエノミホコ / En / 高松宮内張子みき子 / クサボン / 月光社 / 古型今戸人形吉田義和 / コスゲヨウヘイ / コリスミカ / さいとうなおこ / 杉田明十志 / Noe / 高橋野枝 / 高橋操 / f TaKu', n f / 所由紀子 / 長岡哲生 / 西村 FELIZ / 林リウイチ / 張り子人形のやま / 風らい坊 / 細貝まい / みずさゆかり / 水澄美恵子 / ミヤタケイコ / 山口景子 / 吉村眸

【海外】 Jo-Ellen Trilling (U.S.A.) / Katy Rein (ロシア) / Marlaine Verhelst (オランダ) / Tineola.craft (ウクライナ) / Anna Davidenko (エストニア)



山口景子「ささやき」

Cazuko Art 3つの展覧会

(Cazuko Art アトリエ展／特別展／

戸田和子美術館「イノセントの詩」

戸田和子さんが関わる作家たちとの立体とレリーフ作品を展示します。

9月28日(土)～10月2日(水)

10:00～19:00 ※初日は14:00から、最終日は17:30 最終入場

会場 水戸市民会館 2F 展示室 入場無料

茨城県水戸市泉町1丁目7-1

TEL 029-303-6226

展示内容

・第12回 CazukoArt アトリエ展

CazukoArt アトリエ生作品 50 点

・特別展 SNBA 彫刻部門に出展している作家を特別展示

フランスの美術団体 SNBA 彫刻部門に出展した作家作品

戸田和子・森勇人・グロスマン里奈・清水真理

・人形彫刻家 戸田和子美術館「イノセントの詩」

2018 年に同タイトルで発行された戸田和子作品集から 40 点を展示



余韻 Reverberation(2010) 戸田和子

土井典評伝『愛玩拒否の人形 土井典とその時代』

出版予定を延期しております。10 月に刊行予定

戦前生まれの土井典は女に生まれたことを負い目に感じて育ちます。

新潟から上京し、25 才で女子美短大に入学。大学在学中に娼婦たちの姿を見て衝撃を覚えます。卒業後はマネキン会社でメイクを担当。仕事で出会った堀内誠一氏から澁澤龍彦編集の『血と薔薇』の撮影に使う貞操帯の制作の依頼を受けたことがきっかけで土方巽、寺山修司、種村季弘、荒木経惟らとの交流を通じ世界が広がり、人形作家として活動するようになります。

時代を先駆けて FRP を使い、自在な造形で人形界で有名作家となった土井典。

芸術批評、ジェンダー・セクシュアリティ論を専門とし『DOLL FORUM JAPAN』で「ベルメールから」を連載した榊山裕子が、作家をめぐる人々の言葉やメディア、時代を検証し、現在の言葉による土井典の再評価を試みます。

A5 判 250 頁

お問い合わせ dfj-press@nonc.jp まで

URL <https://dfj-press.nonc.jp/>



ANT で作業をする生前の土井典 写真 北村泰宏

展覧会レポート

特集 人間国宝・平田郷陽の人形—生人形から衣裳人形まで—

2024年7月17日（水）～2024年9月1日（日）東京国立博物館 本館（日本ギャラリー）14室



「第1章 想像の原点—生人形」の展示（右から二点目のみ三代安本亀八の人形）

東京国立博物館の日本ギャラリーの一室での平田郷陽の特集では、二代平田郷陽（1903～81）作品を初期の生人形から遺作となった「宴の花」まで4つの章に分けて、人形単体として23点（頭部など完全体でないものも含む）、粘土原型4点と平面作品1点が展示されている。二代平田郷陽は二十代で生人形師として一家を支える大黒柱となった。大正から昭和へと時代の変化にともない、生人形からディスプレイ用のマネキン、個性的な節句人形や鑑賞用の人形をてがけ、母を含んで8人の家族を養う身となった郷陽は市場の傾向を嗅ぎ取りながら生人形師として培った技術や観察力を生かし、どんな人形にも目を見張るような生命力をもたらしした。また、どんたく社から堀柳女などアマチュア出身の人形作家も出現・活躍するなかで、昭和3年に郷陽は岡本玉水ら人形職人たちと白澤会をおこし、人形界を牽引する存在となった。

人形芸術運動がおこる昭和10年には白澤会を日本人形社に発展解消し、日本の人形が到達しうる美術の極みに挑戦した。

ところで郷陽は明らかに、現在球体関節人形といわれる構造の人形を昭和初期には制作していた。生涯を通してその数は少ない。今回の展示で足首に関節がある人形があり、球体関節人形ではないかと気になった。それは昭和10～20年代作といわれる「武士姿三折れ人形」である。

郷陽は大正末期から昭和初期にかけて片岡仁左衛門の肖像人形を制作しているが、これが文献の記録で知る限り日本で最初の、いわゆる球体関節構造の人形ではないかと思われる。郷陽の制作時には球体関節人形という用語は使われていないから、便宜的に三折れ人形と呼んだのだろう。仁左衛門の人形は約60cmだが、写真だけでは等身大の人形にも見える精巧さである。今回の「武士姿三折れ人形」も約50cmほどだが、実物を見るまでは、郷



「武士姿三折れ人形」伝二代平田郷陽作 昭和10～20年代 平田多恵子氏寄贈

陽は生人形師なのでそれは等身大の人形ではないかと筆者は思い込んでいた。

「武士姿三折れ人形」の構造がどうなっているかは着衣の外見からは判断がつかない（会場の説明によると、この人形は武士の全身像で狩りや戦に出かける姿を思わせる付属品があったようだ）。同じ頃に制作された松岡映丘の肖像人形（昭和10年）の写真をみると、同じ構造をしているのではないかと推測できる。松岡映丘は郷陽が帝展で初入選した作品「桜梅の少将」の衣裳を考証した日本画家である。

なお、第二次世界大戦が近づく昭和18～19年には戦時下の空気を反映したような「源到雄（愛国百人一首）」や「勝戦さ」という直立姿の武士の人形を制作している。この「武士姿三折れ人形」の顔は「源到雄（愛国百人一首）」に似通っており、何らかの関係があるのかもしれない。



参考 松岡映丘と平田郷陽作の肖像人形 「ひとがた・カラクリ・ロボット」展図録より

この人形は生人形に使われる張り子ではなく、他の郷陽作品同様木彫胡粉彩色である。郷陽の超絶技法でなければできない人形だろう。郷陽がどうやって球体関節の人形を思いついたかは不明だが、吉田良氏のピグマリオンの公式サイトによればヨーロッパのアンティークドールやデッサン人形を参考にしたのではないかと推測しており、筆者も同じ考えである。きっとそういう人形を見る機会があり、技術への挑戦意欲や発想に富んだ郷陽がこれを肖像人形に応用したのではないだろうか。ちなみに郷陽は戦時下の昭和18年、銅像彫刻の代替としての木彫の肖像人形「木彫衣裳像」を受注すべくリーフレットを制作したそう。そのなかに「一面芸術人形の一分野を開拓する意味において特殊の技法を用いて制作致しました」との説明があるという。この「特殊の技法」とは何なんだろう。

白澤会、日本人形社、日展、伝統工芸会と日本の人形や工芸界を代表する団体で作品を発表し、豊かな才能の変遷を見せた郷陽だが、球体関節を持つ肖像人形については記録においては点数が極端に少なく、どれも男性の肖像人形であることから受注制作など個人的な関係において作られた人形が中心なのかもしれない。資料からは判別しにくい女性の人形に球体関節の構造を施したものは見られないようだ。

生業として需要に応じる形で人形を制作し、写実にしるデフォルメにしる如何様なたち、表現においても天才を発揮した平田郷陽にとって、関節構造は少し遊びの要素を交えた表現手段のひとつに過ぎなかったのではないと思う。

（羽関）

追記 この記事掲載が会期終了間際になったことをお詫びします。今回の展示作品は常設展示はされていないそうなので、関心のある方はぜひ見に行ってくださいと思います。 東京国立博物館 URL <https://www.tnm.jp/>

参考文献

「歿後30年 平田郷陽の人形」展図録（2011年 公益財団法人佐野美術館・佐倉市美術館発行）

「ひとがた・カラクリ・ロボット」展図録（1996年 財団法人品川文化振興事業団 O美術館発行）



左：「秋韻」 右：「秋韻」粘土原型 いずれも二代平田郷陽作
昭和 28 年 (1953) 平田多恵子氏寄贈



「泣く子」 二代平田郷陽作 昭和 11 年 (1936) 平田多恵子氏寄贈
この人形は日本人形社の展示で発表されたが、横浜人形の家にも「泣く児」がある。
受注制作をしていたという話を聞いたことがある。



参考 横浜人形の家「泣く児」
昭和 11 年 (1936)



右：「抱擁」 左：「抱擁」粘土原型 いずれも二代平田郷陽作 昭和 41 年 (1966) 平田多恵子氏寄贈
奥は第 3 章「写実からの解放」の展示

特別寄稿

hitodama ART ～ヒトガタのアート展～

高野明子

(クラフトアート人形コンクール実行委員会)



会場風景

手前は江間ミク「境界」。自分自身の中の境界をテーマにした作品で、お面を持った手と上半身は分かれており、向かい合わせにしたり、距離を変えたりすることもでき、それにより作品が表現する意味合いも変わって見える。

クラフトアート人形コンクールを開催して来年で12年になります。このコンクールでは、「作家本人さえその作品を人形と呼ばれても差し支えない」ものはすべて受け入れることを標榜しています（実際には販売を条件としているため、ある程度ジャンルは限られるのですが）。球体関節人形・固定ポーズ人形・ぬいぐるみ／あみぐるみ・フィギュア、そしてそういったカテゴリーにぴったりとは合致しない作品も出展されてきました。

おかげさまでコンクール本選である“クラフトアート創作人形展”は大勢のお客様にご来場いただくイベントに育ったのですが、お客様の多くはドールと呼ばれるジャンルの人形愛好家で、どちらかという現代アート的な作品は販売に結びつきにくい傾向がありました。こういったアート的な作品は、いわゆる人形展では「これは人形じゃない」と考えられ、アートの現場では「ああ人形ね」と言われてしまう。どちらからも「なんか違う」とはじかれがちです（※筆者は人形という語を日ごろ広義で「人の形をした造形物」として使っていますが、以下本文中ではそれを人形あるいは《ヒトガタ》と記載し、どちらかというドールと称されることも多い狭義の人形を《にんぎょう》と記載します）。

作家本人たちの意識としては、これは《にんぎょう》だ、これは《アート》だと明確に分けて制作しているということはあまりないようで、作品自体をカテゴライズするのは、どちらかといえば作家ではなくて売り手の側です。購買層である観客が好みに合った会場に足を運び、買う作品をチョイスしているということであり、つまり商業の場においてカテゴライズすることによって販売しやすくしているに過ぎません。《アート》と《にんぎょう》は本来明確に分類できるものではないのですが、ぱっと見て《アート》だ、《にんぎょう》だと判断しやすいものが商業の現場にはよくなじみます。どちらともつかないものは扱いにくい《商材》なのです。

であるならば、《アートギャラリー》で《アート作品》として、きっちり展示してお見せしよう、というのが今回の眼目です。人形作家や作品を分断しようという目的はなく、様々な場において、人形をあえてカテゴライズしたかのようにして展示することで、かえって人形の幅広さというものを感じ取っていただけないだろうか、そう考えています。これまでも、クラフトアート人形ではさわって遊べる玩具としての人形を“おにんぎょあそび”で、縁起物やプレゼントとしての手ごろな人形を“おめでとガールズの贈り物”で紹介してきました。今回の“hitodama ART”はその対極とも言えるべき《アート作品》としての展覧会なのです。

“hitodama ART”開催にあたっては、出展作家全員に、作家自身の本質とも言える「ヒトガタ作品をなぜ作るのか、どのように意図しているのか」ということをアンケートで尋ねました。18人のアンケート結果から見てきたのは、《ヒトガタ》をつくるということは、「人間とは、命とは、自分とは」という命題に行き着いた結果なのだったということでした。もちろん人それぞれ、その命題への向き合い方や探求方向は異なり、その現時点での解は展覧会会場に素晴らしいエネルギーと多様性をもって表出されました。



松本実久「輪郭をほどく」

存在しないものとして扱われるテグスを泡のように編み、その泡に球体関節人形を溶け込ませることで、人体へ向かう視線を攪乱しようとする試み



K「C-01N」

作家は一貫したテーマとして、肉体の形状と人工的なモチーフを組み合わせながら、人形というフォーマットの中に生きている人間の姿を表現している。本作ではコルセットを肉体の上に表現

日ごろから芸術を愛好しているというお客様が会場に来られ、興奮気味に「色々なギャラリーをめぐるっているが、こんなものは見たことがない。これは確かにヒトダマとしか言いようがない」と感想をおっしゃったのが印象的でした。常々カテゴライズされた商業の場に足を運ぶ私たちは、知らず知らずのうちに《アート》とはこういうもので、《にんぎょう》とはこういうもので、と、多かれ少なかれそのカテゴリーを受け入れてしまっているのだと思います。その壁を壊すためには、実は踏み込んでいく先の慣習にそろりと馴染みながら、越境し侵犯していくことが必要なのかもしれません。実際にこれまでもアートシーンはそうやって中身を変えてきたのだと思います。かつて茶人が、日常の雑器を茶道具として扱い価値を高めてきたように、人形もアートシーンで見いだされれば、そこで新たな《アート》として《発見》されるのでしょう。

アンケートでは、作家自身の考える《にんぎょう》と《アート》の違いについても尋ねました。そこで複数の作家から得られた意見で象徴的だったのは、「作品は《入れ物》だ」という考えでした。《にんぎょう》には、持ち主が自分の思いなどを込めることができるように、できるだけ空っぽの状態にしておきたい。一方《アート作品》には、作家自身の思想や美意識などを入れることもある。あるいは入れ物としての役割のままでどんな入れ物なのかを定義する。その意味合いによる色付けの濃度のようなものが《ヒトガタ》を《アート》たらしめたり、《にんぎょう》たらしめたりするのではないかな……。そうした考察を少なからぬ作家が抱えていることを知りました。これは平面芸術などではなかなかない考え方なのではと推測します。それはすなわち、人体自体が命や精神や自我などの入れ物であることを作家として表現した結果なのかもしれません。

私自身は人形をアートの一分野として扱い始めたので、どんなものでもアートの可能性があると考えてきましたが、むしろ人形にはアートどころではなく幅広い役割・価値があるところに、他のアートにはない面白さを感じています。それが作家たちの言う《入れ物》としての存在価値なのかと得心しました。ある時は作家の信念を代弁し、ある時は持ち主の祈りや癒しといった思いを受け止める。密なコミュニケーションが可能なメディア、それが人形なのだと思います。

今回は作品を通じて表現された作家の“hitodama”を《アート》として提示しましたが、多くの方々に人形の無尽蔵の価値を見出し続けてほしいと思います。それを提案するのが私たちの仕事だとも思っています。



IWACO「Regeneration」

もぎ取られた片足からでさえ新芽が息吹く姿に、戦争や災害などに遭っても子供たちに強く逞しく生き抜いてほしいという願いをこめた。

【hitodama ART】

2024年7月3日～9日 大丸心斎橋店 アールグロリユー ギャラリー オブ オーサカ

出展：井桁裕子 IWACO 江間ミク En 大園彬 COOL氏 K 新家智子 daikichi 常見一奈 永島信也 Noe/高橋野枝 haruhi はやしゆえに 松本実久 村上仁美 芽々木 森村ひとみ

文中で触れた出展作家を対象としたアンケート結果は、発売中の craft art DOLL 2024 巻末に掲載しています。

【craft art DOLL 2024】A 5判 192 ページ 定価 3,200 円＋税 2024 年 7 月発刊 クラフトアート人形コンクール実行委員会・編 株式会社マリアパブリケーションズ・発行

徒然コラム

現代人形文化研究会が発足して最初の年度が終わりました。
新しい年度を迎え、各理事に所感や、近況を自由に書いていただきました。（順不同）

西村 FELIZ

前身団体であるコヤーラから法人化され早くも二年目となりました。一般法と違い制約も多いため、活動を安定化するために引き続き役員一同絶賛悪戦苦闘中です。とはいえ、個人的に困難は嫌いではありません。中南米を旅していた時に遭った様々な困難も、結局はそれを乗り越えて成長することができました。いかなる困難も必ず乗り越え、以前よりは必ず良くなることができるという妙な過信と自信と確信が自分の中にはあります。まだまだ至らぬ所が沢山あるかと思いますが、人形に関して新しい機会と何かを模索し続けてゆこうと思っておりますので、皆様には引き続き暖かく見守っていただければ幸いです。本年度もどうぞよろしくお願いいたします。

榊山裕子

現代人形文化研究会は創作人形を広く知ってもらうために展示や情報発信を行っています。まだまだ助走段階ですが、わたしが関わるのは主に後者です。このところ人形作家・土井典の評伝執筆を通して創作人形を取り巻く言葉を見てきましたが、苦労したのは人形についての過去の資料の蓄積が少ないことです。人形作家や人形研究者にとどまらず、様々な分野の人が「人形」について考え語ろうとするときに役に立つ資料の必要性を身にしみて感じています。微力ながらそういう気持ちをこれからの現代人形研の活動に活かしていけたらと思います。

羽関チエコ

暑さが猛威を振るった今年の夏。思えば昨年7月、「現代人形文化研究会」のNPO法人申請をするために、新宿の東京都庁に通ったのも猛暑の日々でした。試験のように小さなミスを指摘され、心折れそうになりながら何度も通ってやっと受理、認可の運びとなりました。そうやって設立にこぎつけたNPO法人の運営は慣れない手続きの連続で手探りのうちに初年度を終了。当初の事業計画としてあげた活動には、まだ本格的に取り組めていません。この会としてやるべきことがたくさんあります。会員の皆様のご協力、活動へのご参加なしでは継続できません。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

井桁裕子

NPOの立ち上げからここまで、理事とは名ばかりでお役に立てずの日々ですが、視野を広げつついろいろ考えを巡らす機会をいただいています。「人形」に「現代」が被さると、何か目新しく活発な印象があるわけですが、個人的には「現代」から疎外されていく方向へ向かう制作活動でその矛盾を大事に抱えている感じです。

ところで、「研究」したい本が一冊あります。羽関さんからご紹介された本で、昭和34年発行の「今日の人形―鑑賞と技法」です。タイトルの通り65年前の人形表現が紹介され論評されており、人形についての思考や評論でここまでの到達点がありながら、それがどこにも引き継がれず忘れ去られているのが驚きです。

こういう過去の掘り起こしにも、現在進行しつつある創作人形市場の広がりにも、その両方に関心があります。

ユニバーサル プーヤン

以前、ご依頼を受けて観音様を制作させて頂いたのですが、その時は観音様は初めてだったので、だいぶ四苦八苦しました。

今回大変有難いことに、またご依頼を頂いたので制作しましたが、結局今回も、かなり四苦八苦してしまいました。

そして、またぜひ作りたいと思っています。

今までは樹脂などをメインに使用して作っていましたが、今後、観音様を作る時には、より天然の素材も使用して作れるようになっていきたいと思います。

背景は AI 生成で合成してみました。



本多厚二

僕個人の中ではつくること描くことのはじまりは“遊び”なんだとおもいます。

そこには自分自身を含めた人とかかわりがあって、だからこそ、そこに、そういういきもののカタチがある気がします。

何かしらの言葉で補完する試みが、彼らの、より世界が広がっていく、ひらかれた公園のようなものをつくるかもしれない。と思っています。

